

神奈川県横浜市こども青少年局

【総人口】 3,769,220人

【主担当部局】横浜市こども青少年局
保育・教育支援課

【主な関係部局】横浜市教育委員会
小中学校企画課

【自治体 関連URL】 <https://www.city.yokohama.lg.jp/kurashi/kosodate-kyoiku/hoiku-yoji/shitukoujou/renkei/default20220908.html>

	幼稚園			保育所		幼保連携型 地域裁量型		小学校		
	国立	公立	私立	公立	私立	公立	私立	国立	公立	私立
施設数	0	0	220	58	1,453	0	67	1	337	11
園児・ 児童数	0	0	32,457	5,646	70,985	0	13,904	642	171,621	4,777

架け橋期の カリキュラム開発 会議	【会議委員人数】 23名	【開催数】 6回
	【委員属性】 座長：大学名誉教授 委員：私立幼稚園長4名、私立保育園長2名、私立認定こども園長1名、公立保育所園長4名、公立小学校長5名、教員養成大学准教授1名、市教育委員会担当者1名、市こども青少年局担当者4名	

架け橋期の カリキュラム実施における 協力園・協力校	【令和5年度】 本郷台地区（1私立幼稚園、1公立小学校） 初音が丘地区（1私立幼稚園、1私立保育所、1公立小学校） 東本郷地区（1公立保育所、1公立小学校） 山元地区（1公立保育所、1公立小学校）
	【令和4年度まで】 鶴見地区（1公立保育所、1公立小学校）

架け橋期の コーディネーター 等	【配置人数】 指導員3名 調査員1名	【経歴】 ・元公立小学校長3名、元公立小学校副校長1名
------------------------	-----------------------	--------------------------------

カリキュラム開発会議

1 開発会議における議論

・「架け橋期に目指す子どもの姿」について協議した。「問いをもち、問い続ける子ども」「やりたいこと・好きなことを見付け、試行錯誤（探究）できる子ども」等の「大切にしたい姿」が見えてきた。

・横浜市では、「よこはま☆保育・教育宣言」や「横浜教育ビジョン」「人権教育の充実に向けて」等、乳幼児期から児童期以降を通して大切にしている保育・教育の方向性が示されている。これらを保育士・教諭が理解し、目指す姿を具体的にイメージしながら協働してカリキュラムを作成していくことの必要性が明確になった。

2 架け橋期のカリキュラムの方針

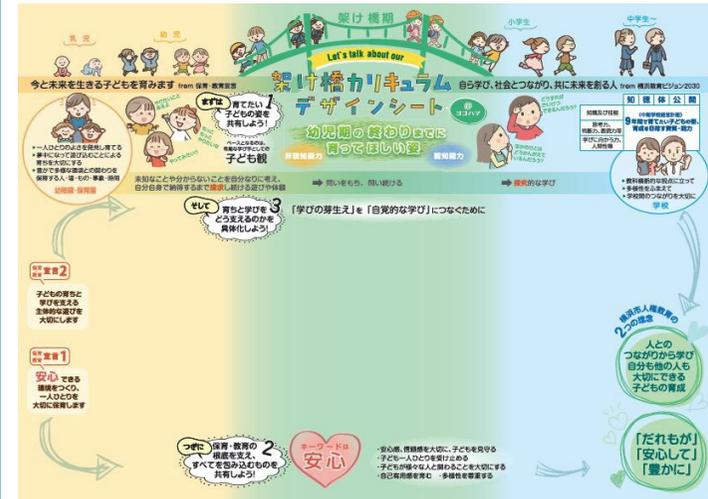
・横浜がこれまで取り組んできた接続期カリキュラム（アプローチカリキュラム、スタートカリキュラム）は今後も大切にしながら、0歳から18歳までの学びの連続性をより意識した取組に広げていくことが必要であることを共有する。

・共通のフォーマットを提示して「カリキュラムを新たに作成する」ことに注力するよりも、園や学校に今あるカリキュラムを「対話を通して運営・改善する」ことに主眼を置く。

・園や学校の対話を想定すると、「どのような対話を行えばよいか」「どうすれば、カリキュラムとして視覚化できるか」の具体的な発信やツールが必要であることが分かり、令和4年度にカリキュラムデザインシートを作成した。令和5年度からはこのシートを活用しながら、架け橋期に目指す子どもの姿や共通して大切にしたい支援・援助を見出して、各園、学校の保育・教育内容を組織することを推進する。

・教育委員会事務局が平成31年に作成した「カリキュラム・マネジメント要領」は、市としての架け橋カリキュラムを担うものになっており、各学校、園において、具体的な子どもの姿を通して、幼児期の終わりまでに育てほしい姿とともに理解、共有していく。

・各園、学校が具体的な活動や遊びの重要性をイメージして架け橋期のカリキュラムマネジメントが行えるよう、実践事例集や、架け橋プログラムだよりなどの情報発信を丁寧に行っていく。



架け橋カリキュラムデザインシート

3 会議設置による成果や課題

<成果> 改めて、これまで横浜が大切にしてきた「育ちと学びをつなぐ」という視点からの幼保小連携の様々な取組の価値が確認された。

<課題> その一方で、新たに提示された「架け橋カリキュラム」と従来の「接続期カリキュラム」の違いや関係性について、横浜としての文言の整理や定義づけが必要であることが明らかになった。

架け橋期のカリキュラム

1 カリキュラム開発に向けた道筋

第1段階・・・「園と学校との対話を充実させる」

- そのための「ツール」としてカリキュラムデザインシートを開発した。充実した対話が生まれるよう「夢中」「困り感」「特別な配慮」など、「視点」となる6つの話題を提示した。
- 幼保小の教育をつなぐ共通の視点として、第一に「子ども観の共有」、第二に「ベースとなるのは『安心』」、第三に「『問いをもち、問い続ける子ども』を育てることを目指して、『学びの芽生え』を『自覚的な学び』につなぐ」を示した。
- 各幼保小連携地区等での活用を促し、グループワークを通じた気づきが、双方の実践やカリキュラムの工夫・改善に反映されるよう支援した。

第2段階・・・「充実した対話が、保育・教育に生かされるよう促す」

- そのために、様々な情報発信や研修会等を実施した。
- 情報発信：「架け橋プログラムだより」実践事例集発行 学校HP用にバナー提供
- 研修会等：スタカリ公開授業研・保育参観 各種研修会 探究心を育む「遊び」研究会
- 具体的支援：幼保小連携ブロック研修会での助言
- 1年生の学習指導案に児童の実態として園での経験等を記入することを全小学校に依頼した。1年生担任が園での経験を児童に尋ねるなどしてリサーチし、授業等に生かされた。

第3段階・・・「保育・教育への反映を持続可能とするよう支える」

- 『見える化』と『運営・改善』を具体化するために「横浜版接続期カリキュラム改訂版」を発行する。
- 幼保小交流事業・推進地区事業（ともに横浜市独自事業）のさらなる充実を図る。

2 「知り合うことから生かすことへ」～架け橋期の保育・教育を考える～

★園での経験を指導案に記入したことで・・・

- ・「園ではどうだった？」と尋ね、子どもたちの園での経験から授業の構成を考えたり、身に付けたい資質・能力が明確になったりした。
- ・園の先生に話を聴くことが、支援や手立てを学ぶ機会になった。

★「探究心を育む『遊び』研究会」の取組で・・・

- ・主体的に遊び込む子どもの姿を大切にしたい多くの取組が、園からも学校からも報告された。
- ・それを支える環境の大切さや子どもの見取り、保育士・教諭の働きかけのあり方が見えてきた。

グループワークのやり方
話題「夢中」を使って紹介します。

ワークの進め方

- ①【1】から、思い浮かんだ場面を付箋にひとこと(1つか2つに限り、短く書くのがおすすめです)書きましょう。
- ②付箋をワークシートに貼りながら、「ひとこと」から広がるエピソードをお互いに話したり聞いたりしましょう。メモを書き込んでもいいですね。
- ③それぞれのエピソードについて、共通点を見付けたり内容を深めたりするために、【2】について考え、付箋やメモを書き足したりつけたりしてみましょう。
- ④さらに、【3】について話し合い、共有したことをキーワードにまとめてみましょう。これによって、参加者みなさんのアイデアで作ったわたしたちの「架け橋カリキュラム」が一つできました。

さあ、話題の一つ選んで、ワークに取り組んでみましょう！

デザインシートに掲載した「話題」

★4月の授業公開、秋の保育公開で・・・

- ・入学当初の1年生の様子を、幼保小の職員で参観し、その姿を基に協議会をもつ公開研には、2校で計230名の参加があった。園での育ちを繋ごうとする小学校の取組に対する園からの喜びの声が多く聞かれた。
- ・秋には認定こども園で保育参観を実施し、オンラインも含め333名の参加があった。子どもの姿と保育者の見取りや関わり、環境構成等について協議が行われ、主体性などの今求められる力を育む子どもの姿についての理解を深めた。

架け橋期のカリキュラム

3 育ちと学びをつなぐ、架け橋期の充実の実際（実践事例集に掲載）

事例1 互恵性のある交流活動を支える職員間の交流

- ・「1年生がしてあげる」から始まった子ども同士の交流だったが、職員同士で交流のねらいを確かめ合ったり、回を重ねたりする中で連携を深め、安心して関わり合う関係性へと変わっていった。
- ・学校長が、5歳児と1年生の接続だけでなく小学校6年間も「架け橋」としてつなぐことの大切さを強く感じ架け橋期を大切にしたい学校経営への改善が図られた。

事例2 社会とつながる本気の活動に幼保小連携推進地区で取り組む

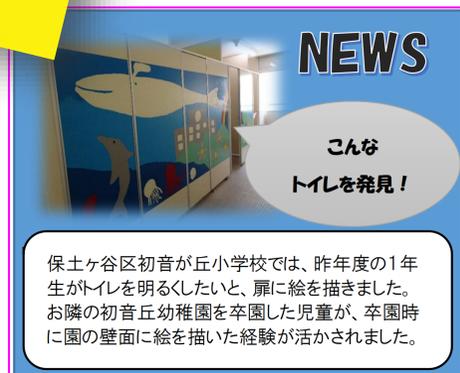
- ・「エコキャップ運動」という社会の中の本物の課題に取り組む5・6年生の協力依頼を受け、幼児が本気で向き合い園全体を巻き込んだり、様々な資質能力の育ちが見られたりする豊かな活動となった。

事例3 「やったことある！」を生かして、安心できる「トイレ」へ

- ・一人ではトイレに行けない友達のために、トイレに絵を描いて明るくしようと考え、1年生が取り組んだ。卒園時に壁面にペンキで絵を描いた経験を生かしたり、学校用務員への協力を依頼したりして、自信をもって活動した。
- ・主体的に活動しようとする子どもを価値付け、話し合いを視覚化することで、確かな学びとなった。

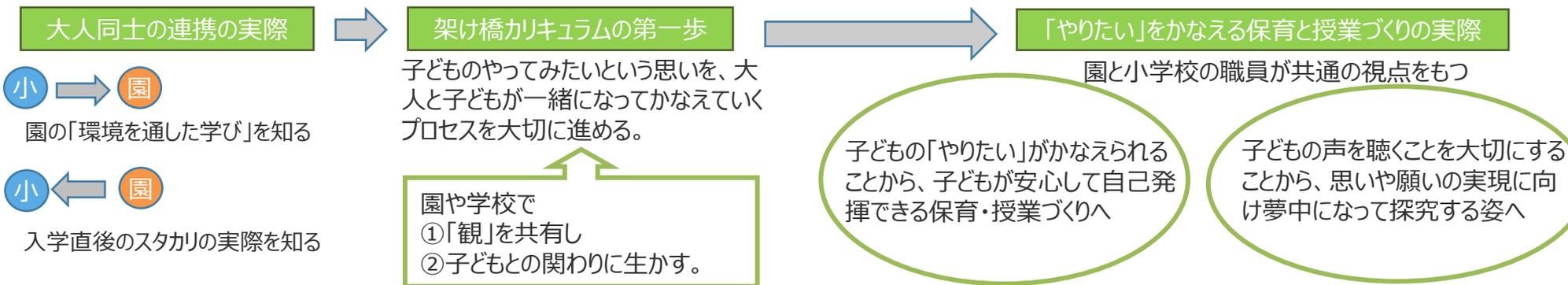


実践事例集



4 カリキュラム開発協力園、校による取組の発信（実践事例集に掲載）

事例4 「一緒に大切にしたい子どもの姿を見付け、双方のカリキュラムに生かす～一人一人の『やりたい』がかなえられる保育と授業づくり～」



次年度への展望

1 R6年度に向けた成果と課題

○「架け橋プログラム」の認知度がUP！

全市の園・小学校における「幼保小連携接続に関する調査」の結果から、「架け橋プログラム」についての認知度がかなり上がったことが分かった。

R4年度末 小学校47.6% 園64.1% → R5年度末 小学校92.6% 園97.5%

○定着・発展は悩みどころ

幼保小連携推進地区等の様々な取組が成果を上げている一方で、推進地区としての指定（3年間）終了後の定着や発展は一様ではない。「架け橋カリキュラムデザインシート」を活用した資質・能力ベースでの対話が進んできたが、実際の保育内容、授業への反映のさせ方に差が見られる。「見える化」したり、カリキュラム・マネジメントを進めたりするために、具体的な手掛かりが必要である。

○小学校長の「学校経営の柱」としての意識の高まりがカギ！

接続期の様々な取組は、年長児の担当及び1年生の担任が主に関わるものだという意識がいまだに強く、園や学校全体で共通認識をもち取り組むべきだという考え方がなかなか浸透しない。一方で、小学校では個別最適な学びと協働的な学び、社会情動的コンピテンシーの育成といったことへの関心は高い。実はこれらが幼児期の教育の中に子どもの育ちとして非常に分かりやすく表れていること、だからこそ、育ちと学びを丁寧につなぐことが、学校経営の視点からも非常に有益であることを学校長が理解することは、架け橋期の充実にとって非常に重要である。そのため、学校長をターゲットとした仕掛けをどのように実現するかが課題である。

2 R6年度＜最終年度＞の具体的な取組計画

第3段階・・・「保育・教育への反映を持続可能とするよう支える」

→『見える化』と『運営・改善』を具体化するために「横浜版接続期カリキュラム改訂版」を発行する。

→幼保小交流事業・推進地区事業（ともに横浜市独自事業）のさらなる充実を図る。

幼保小教育交流事業、推進地区事業の充実
 ・教育交流事業の現状や改善に向けた手立て
 ・「環境構成」に焦点化した取組

幼児期の教育における環境構成の充実とその在り方を、小学校のカリマネに活用できるようにする。

令和6年度横浜版接続期カリキュラム改訂

仮題：横浜版接続期カリキュラム

～育ちと学びをつなぐ架け橋期の充実～

- ・カリキュラムデザインシートと使い方
- ・アプローチカリ、スタカリを見合っでの運営・改善
- ・足跡カリキュラムや日案の例示

- ・小学校の教科等における単元計画の作成
- ・園の月案・週案等の見直しや充実のための手立て

目指すは・・・架け橋期の充実をきっかけとして、「社会に開かれた教育課程」や、「教育課程全体を通して、育成を目指す子どもの資質・能力を育む」ことを実現すること！